

チベット問題の本質と世界の中の日本

（2022年11月2日 楓門祭 比較法制研究所 公開講演会）

国際日本文化研究所客員教授

ペマ・ギャルポ

キーワード

チベット, ダライ・ラマ, 人権

宍倉：よろしいでしょうか。それでは時間になりましたので、ただいまより令和4年度国士館大学比較法制研究所公開講演会を開催したいと思います。初めに主催者を代表いたしまして、本学の佐藤圭一学長より皆さまにご挨拶を申し上げたいと思います。学長、よろしく願いいたします。

佐藤：皆様、こんにちは。今年、令和4年の比較法制研究所の主催公開講演会にはペマ・ギャルポ先生をお招きしました。私自身は、いわゆる「チベット問題」について、ご出演されたテレビ討論会やご著書を通じて、かなり以前から存じ上げておりました。本日、これから行われます講演「チベット問題の本質と世界の中の日本」は、時宜を得たものとなりました。

と言いますのも、ロシアによるウクライナ軍事侵攻が始まった2月24日から8か月半が過ぎようとしています。独立国であり国連加盟国であるウクライナへの一方的な軍事侵攻は、恒久的世界平和の実現のために人類が築き上げてきた「自決権や主権の尊重、人々の生きる権利、自由を享受する権利」という国際規範を根底から覆すものとなったことになりました。

実は、チベットも同様でした。チベットはかつて中国政府が認めた独立国

家だったのです。それが1950年に始まる武力侵攻が始まって以来、今日まで一方的に、そして過酷極まりない弾圧を受けてきました。皆さんも御存知のチベット仏教そしてチベット民族の国家的・精神的指導者であるダライ・ラマ14世は1989年にノーベル平和賞の受賞者でもあります。ところが中国では国家転覆を企てる「危険人物」と見做し、人々がダライ・ラマ14世と接触することを厳しく禁じています。しかし、ダライ・ラマ14世は中国からの独立を求めているわけではありません。現在の正式な名称は「チベット自治区」ですが、その名に相応しい自治を求めているに過ぎないのです。

今、中国は「指導者」への、権力集中と個人崇拜が徹底されつつあります。この度のロシアによるウクライナへの軍事侵攻によって明らかになったことは、強権的指導者に共通する異常な歴史観や世界観、そして地位への異様な執着と、抑えの効かない権力行使への欲求です。

「チベットは諍いを諫める仏教の国」、日本は核保有国に囲まれながらも「平和憲法の名の下に戦いを放棄した国」。台湾有事、そして尖閣諸島への野心を隠そうとしない国と接する日本にあって、日本には「チベット問題」から学ぶことが沢山あります。ペマ・ギャルポ先生、宜しくお願い致します。

宍倉：佐藤学長、ありがとうございます。なお学長はこの後公務があります関係でご退席いたします。ご了承いただければと思います。

申し遅れましたが、本日の司会とコーディネーターを務めさせていただきます、法学部の教員の宍倉と申します。本日は宜しくお願い致します。

それでは早速ですが、本日ご講演いただきます、ペマ・ギャルポ先生にご登壇をいただきたいと存じます。よろしく願います。ご講演に先立ちまして、私のほうから簡単ではございますけれども、先生のご紹介を申し上げたいと思います。

こちらのご著書のほうにも書いてありますが、先生は1953年にチベットでお生まれになりまして、59年にインドのほうに脱出され、1965年から日本のほうに移住をされました。その後2005年に日本国籍を取得されて帰化をされております。政治学博士であり、また国際日本文化研究所の客員教授

をはじめ数多くの要職を担われているということで、私から改めてご説明申し上げますところでもないかというふうに思います。また数多くのご講演、ご著書を著しておられるということで、多方面でご活躍されている先生でございます。本日は大変ご多忙の中、本学で貴重なご講演の機会をいただけることとなりました。本日この会場の外にて、先生の最新のご著書『中国が仕掛ける東アジア大戦争－安倍晋三元首相が提唱したインド・太平洋構想が世界を救う』を販売しておりますので、ぜひともご購入をいただければと思います。それでは早速ですけども、改めまして先生よろしくお願いたします。

ペマ：どうも、こんにちは。ちょっと失礼して座って、せっかく椅子出していますから。皆さん、こんにちは。今日は、国土館大学でこのような機会をいただき心から感謝申し上げたいと思います。ただこれから私が話すことは、全て私個人の責任において話すことであって、大学において私を紹介してくださった先生、それに同意してくださった先生、あるいは大学の関係者が事前に私の考え方に納得してやってるわけではないということを申し上げたいと思います。私自身が、今まで来年いけば70になるんですけど、生きてきた中において経験したこと、読んだ本、出会った人、さまざまな影響を受けてると思います。ですのであくまでも私ペマ・ギャルポ個人の意見であって、また私は誰のダライ・ラマ法王の代表を15年間やってきましたけれども、チベット亡命政府の意見でもありません。あくまでも一チベット人、また現在は帰化して日本人としての意見であるということを申し上げたいと思います。

もちろん人間ですから私たちは、言葉を発する時には多分それなりに計算して考えて発していると思います。ですから私がここで話すことは、あくまでも私から見た世界、私が知っている真実であって、特に学生の皆さんは私の言うことにも疑問を感じて、自分で調べて真実は何かっていうことを確認してもらいたいと思います。なぜならば、やっぱり世の中にはうそを100回言えば本当になるというふうに信じてるものがあります。それに似たようなことが、日本の皆さんが多分中国人ですら信じない中国5,000年の歴史とか、

広い中国とかというような概念を持っております。ですからまず最初に私は、この今の世界においては少なくとも国連に193カ国、国連に入っていない実際存在する、例えば台湾なんかもそうです。私たちが国家としての定義として、ある一定の領土があって、そこにちゃんと行き届いてる法律があって、そしてそれによって束縛を受ける国民が存在して、しかも一部の国から承認されてるっていうことを考えてみたら、台湾もまさに国家だと思います。また日本の外務省のホームページには、アジアは27カ国プラス1とかなってると思います。それは北朝鮮と日本は外交ないですから、恐らくそういう意味で北朝鮮が入ってないから27になってるだろうと思います。アジアの定義もまた国連の定義だと、多分47～48の国になると思います。

世界地図が変わるように、私たち人間が年取って、私が日本に来た時は13歳のもう本当に初々しい青年でした。その前の7歳の時は、今回のウクライナの戦争の中で逃げてる子どもたちと同じように、私もヒマラヤを越えて難民としてきました。今、私はもう70近くなって来年70になるんですけど、耳も少し遠くなって歯も抜けて、人間自分自身の顔は毎日見てるから年取ってるように思わないんです。同じように、この地球儀の中においても消えていく国にもあれば、新しく生まれる国もあります。シンガポールは私が日本に来た1965年に生まれました。半分マレーシアから追い出されるような形で生まれました。私が日本に来た時は、ベトナムは2つの国でした。バングラデシュは存在しませんでした。同じように、スタンの付く国々、旧ソ連から独立した国々も、もちろん存在しません。だけどそういう国が生まれました。逆に消えていった国もあります。その一つが私の祖国チベットであります。ですから今のこの世界地図においてはチベットは存在していない。

1950年、中華人民共和国の軍隊がいきなり入ってきて、そして51年には条約を結びました。北京政府は、特に先ほど学長先生のごあいさつにもありましたように、習近平とか毛沢東とか、あるいはプーチンたちは、一方的に自分が描いている幻想というか、自分が作り上げた歴史観というものを持っています。中国はよく5,000年前からチベットは中国の一部であったとかよく

言います。5,000年前に果たして中国そのものがどのような国であったかということも、多分定かではないと思います。私たちは、少なくとも歴史上においてチベットは今年で2149年です、国としての歴史を持っています。5,000年前のことは、多分チベットにおいてどの王様が、どういうことになったか正直いって分かりません。もちろんあの地域に人間は住んでたと思います。私たちが分かるのは、チベットで初めてニヤティ・ツェンポっていう王様になって統一国家、あるいはみんなが担ぎ上げて国ができました。それから642年には当時チベットが逆に中国を侵略して文成公っていうお姫さまを無理やり、チベットの王様のお嫁さんとして連れてきました。さらに717年に、もう一人の中国のお姫さまがチベットのお嫁に来ました。でもこの時は私たちのほうが騎馬民族ですから、しょっちゅうを相手を侵略してました。私たちのほうが侵略者でした。彼らは農民で、われわれ遊牧民で騎馬民族です。彼らが一生懸命、土地を耕してこれから食べようっていった時に、われわれが行ってかっぱらって取ってきたわけです。これが歴史です。

今日は、チベットのことをたくさん言う時間がないので、少なくとも日本の皆さん、特に皆さんのおじいさんおばあさんぐらいの人だったら、まだかつて日本と中国が戦争したけど、もし私たちが中国の一部であれば次の地図をお願いします。

次の地図、これが現在の中華人民共和国、彼らがいうには56の民族がいると。それからその中には自治区とか自治州っていうのがあります。自治区とか自治州っていうのは、本来であれば自治が付くから自治があつて当然ですけど。今のところは、多分自治の付いてる植民地っていったほうがいいと思います。本来であれば中国でないということ。今、中国は940万平方キロメートルです。

日本の皆さんが、あの5,000年の中国の文化とか、あの広い中国っていうのは日本人だけが持つてる幻想です。あるいは多分、日本の中国専門家のかたがたは、中国の文献しか見てないから中国という眼鏡を通して見たから、そういうふうになったかもしれません。しかし現在の中国は、1949年以後

の話です。あんなに広くなったのは。このチベットが240万平方キロメートルです。240万平方キロメートルにおいて、少なくとも1949年、中華人民共和国ができて翌年にチベットに軍隊送るまでは、中国に支配を受けたことはありません。もしあったら中国政府からでもいいですけど、なんていう人がチベットを統治したか聞きたいです。私たちは中国に税金納めたこともありません。ただ6世紀、7世紀から中国とチベットは、戦争をしたり平和条約結んだり、それから特に1640年代、元朝の時代になってモンゴルの人たちがチベット仏教を信仰するようになりました。そこで、モンゴルの王朝である元朝とチベットはお寺と檀家の関係ができました。でもそれはどっちかがどっちかを支配するってものではなかったんです。中国が今目指してる中華大民族の復興というところが、かつて元の時代に配下に入れたところまでが中国であると。それを取り戻すことが中華大民族の復興であるということ言ってるわけです。しかし元朝はモンゴル人が中国を侵略してつくった。中国人がモンゴルを侵略してつくったわけではありません。ですからこれは中国ではなくて、モンゴル人の王朝です。

同じようにチベットは、清(しん)の時代、清朝の時も世界に領土を拡張しました。しかし、清朝の満州の人たちは、チベット仏教を信仰するようになりました。ですから最後の皇帝まで、中国の清朝の皇帝たちはチベット仏教を信仰していました。ですからそこにはお寺と檀家(だんか)の関係ができました。今こうやって大きくなってるのは1947年に南モンゴルが中華民国の時に自治区化されたからです。それはなぜかっていうと、モンゴルの人たちはかつての満州を見て、自分たちも日本に助けてもらって国をつくりたいということで、日本が協力して王様ができました。だけど日本が負けたことによって中華民国の配下に入りました。1945年に日本が敗戦、皆さんは終戦っていうけど、私は敗戦のほうがむしろはっきりするんじゃないかなと思ってるんです。

その次に1955年にウイグル、東トルキスタンが自治区になりました。チベットは1950年に2万人の中国の軍隊が入ってきました。その時チベット

には、27万人のお坊さんがいました。お坊さんは朝から晩まで平和を祈るんです。チベットには2万人の兵士しかいなかったのです。この2万人の兵士も1万人はラサを中心に、ダライ・ラマ法王の警護をはじめ、中央チベットの治安を維持するため。残りの1万人が240万の広い領域を守るっていうか警備する。チベットには正直申し上げて1900年代まで国旗もなかった。残念ながらチベットは1600年代までは、どこの国にも負けない文明国家でした。皆さんは、ポタラ宮殿見たことがあると思います。ああいう建築もやりました。素晴らしい宮殿を造る。仏教美術がありました。仏教の占星術がありました。チベット医学が発達しました。しかし中国はチベットには農奴がいて解放しましたとか、チベットは山の国だったということを宣伝するわけです。日本の中にもそれを信じてるかたがたが、かつてはたくさんいました。

私がこうやって皆さんの前でしゃべる時も、どうせあの人はもともと支配階級だからだとか、そういうこと言いました。だけど皆さん考えてみてください。私たち遊牧民がなぜ農奴になるんですか。彼らが北京で頭で考えて勝手に他の国の歴史を書いているんです。チベットが野蛮だって。男性の人口の25%、お坊さんでした。お坊さんが文字の読み書きできなかつたら、お坊さんなれないんですよ。ですから、チベットは決して山の国でもなければ、非文明国家でもなかった。1642年まで、チベットはむしろ軍事大国、先ほど申し上げましたが、私たちが逆に中国を侵略したこともあります。侵略されたことも国境にはあります。しかしチベット本土にはなかったんです。

だけど1640年になり、ダライ・ラマ5世が、政治と宗教を両方のトップに立ちました。チベットには4つの仏教の宗派があります。それぞれには管長あるいは大座主がおります。全ての宗派を超越した立場にあります。ダライ・ラマ法王は灌頂の灌頂になりました。一部の日本の方、本当にチベットについての関心持って勉強してくださる方も、時々ダライ・ラマ法王のことは、ゲルク派の管長のようなこというけど、それは大きな間違いです。第5世は自分のお寺を自分の先生に差し上げて、そしてゲルク派にはガンデンティチェンという＝大座主あるいは管長もいるんです。サキヤ派にはサキヤ

ティチェンがいます。このようにそれぞれ大座主ってというのがいて、自分はその上の王様になりました。それと同時にチベットは鎖国政治を執りました。鎖国政治を執って外国人入れなかったんです。ですから、河口慧海先生とか寺本婉雅先生、成田安輝先生のような日本のお坊さんがそれまであるいはお坊さんに化けた日本人が10名チベットに入りました。多田等観先生もそうです。青木文教先生もそうです。私の恩師の木村肥佐生先生もそうです。そのかたがたの中には、仏教のチベットから経典を持ってくる。なぜかというところからチベットに仏教が直接伝わったけど、日本の場合には中国経由で来たので、本物の経典が欲しいということで行きました。それが一つの目的です。

もう一つは当時の日本は戦略、戦術がありました。やがてアメリカと戦争になる、そういう時にチベットを味方にしようという特務機関としての役割がありました。それと同時にチベットを改革しよう。チベットでは当時の若い一部の青年たちは、木村先生たちの影響を受けて、明治憲法のような憲法を作ろうという動きもありました。なぜこのかたがたが、お坊さんに化けていたかというところ、チベットはそれ以外の外国人を入れなかったんです。入れなかったってことはチベットには外国人、中国人も含めて入れない主権があったんです。国家が存在したんです。今日僕が持ってくるのを忘れたけど、チベットにはチベットの紙幣もあるいは金貨までありました。チベットの切手は世界に通用しました。1947年、初めて第1回アジア大会、新たに戦後生まれた国々が、ニューデリーで当時のガンジーの呼びかけでアジア大会をやりました。このアジア大会の2回目がバンドン会議で、そしてバンドン会議が今のNAM、非同盟諸国連合になってます。その時はチベットの代表団はチベット政府が発行したパスポートを持って、中国を含む英国、アメリカなどを訪問しました。

ただし残念なことにチベットは、中国が入ってくる時まで外からの文化を入れるのに遅れました。日本が1868年に明治維新ができて近代化できたけど、多分そこまではチベットと日本はそんなに国としての力は変わらなかったと

思います。社会の仕組みも似ていると思います。そこで日本は近代化に踏み切って、今日の繁栄があるわけですけど。私たちは仏教さえ拝めばいいと、ですから国旗もなかった。この国旗は実は日本人の青木文教先生と矢島保治郎先生、この2人がダライ・ラマ13世に対して提案して作った国旗なんです。青木文教先生は、もちろん仏教の勉強に来ました。青木文教先生が、この国旗を立案したというか、作ったって言うてるし、矢島先生は矢島先生がやったってこと言うてるけど。多分、私が思うには国旗が必要だっていうのは矢島先生がおっしゃった。なぜかというチベットは、英国から侵略を受けました。英国といってもインド領英国から。それがちょうど1903～1904年の日露戦争のちょっと前でした。それでチベットは、やっぱり近代的な軍隊が必要だっていうことを、ダライ・ラマ13世は覚醒した、感じてたんです。

軍隊をつくる時に、ドイツ、英国、日本、どの国の軍隊を軍事項目として受け入れようかといった時に、ちょうど矢島保治郎先生が、日露戦争の後にチベットに流れてきました。その時チベットには軍旗があったんです。軍旗はあったけど国旗がなかった。先ほど申し上げましたように、1642年から外の国との関係を持たなかった。確か日本も江戸時代になってフランスの万博の時に初めて国旗というものの必要性を感じた。ですから私たちは近代化に遅れた。

それからチベットのソンツェンガンポ大王という王様が、16条憲法を作りました。日本には、聖徳太子の17条憲法があります。これもほぼ同じ時期にできてるのです。日本の平和憲法って、今の憲法第9条をもって皆さん「平和憲法、平和憲法」と言うけど。私は、聖徳太子の和の精神の17条憲法こそ平和憲法だと思います。残念ながらチベットの16条憲法には、この和をもって尊しとするっていう第1条がないんです。なかったんです、当時。だけどその後は、仏法僧に帰依するところからほぼ同じです。だけどあの時代においては、ファクスマもなかったし、コピー機もないし、どうして同じような憲法できたか。多分その一つは、共通にある仏教です。もちろん儒教の影響もあったでしょうけど、日本の第2条、チベット第1条に仏法僧に帰依

するというものがあります。ですからチベットは、後に私たちが難民になってダライ・ラマ法王が暫定憲法を作るまで、この16条憲法が唯一の憲法でした。そこでこの中国が2万人の軍隊を送ってきた時に、私たちは2万人の軍隊あっても、それはもうあの広い土地守るのに十分じゃなかった。近代的じゃなかった。27万人のお坊さんは平和を祈るだけでは平和を守れなかった。ですからここは多分、私はやっぱり特に日本の皆さんに申し上げたいことは、平和って言って叫んでやっても、平和は守れるものではない。これ私自身、痛感しております。

で、もう一つなぜチベットが独立だったと証明できるかっていうと、中国とインドの間に国境紛争があります。この争ってる国境っていうのは、本来はチベットと英国の間の条約です。1914年、シムラ条約というのがあって、当時英国領インドとチベットの間に結んだのがシムラ、マクマホンラインです。マクマホンラインというのは、英国領インドの外務大臣のマクマホンっていう人の名前から取ってるんです。後に、英国がインドを去った時に、それまでの条約は全部インドがそのまま引き継いだんです。ですから本来であれば、これがチベットとインドの国境です。だけど今の中国は、そのような条約は無効であると。なぜならば中国に言わせると、あれは一地方政府が勝手に外国と結んだ条約であるという、彼らはそういう解釈をするんです。ですから、中国の場合には条約とか、そういう約束事は、多分自分たちの解釈でいくらかでも変えられる。国際常識とか国際法とか、そういうのは関係ないということがいえると思います。

49年に中華人民共和国は成立しました。中華人民共和国が成立した、その時に毛沢東は既に、まだ革命は終わってない。完全に世界革命、世界を共産化する。そして中国が正当な領土を回復するまでは革命は終わらない。そして中国の正当な領土というのが、少なくともその後の中国の教科書を見ると沖縄まで入ってる。

それが彼らがいる自分たちの正当な領土。そして中国にとって2つの屈辱。その一つの屈辱はアヘン戦争で負けたこと、もう一つは日中戦争で日本に負

けたこと。この2つの名誉回復をしなければならない。チベットは、49年、毛沢東が次はまずチベット解放する。彼らのいう解放です。私らからすると侵略です。冒頭、申し上げましたように、言葉は、あるいは物事はその立場によって認識によって違います。同じ現象、同じ出来事についても、私たちからするとそれまで自分たちが一切中国の影響もない、自分たちが運営した国があった。そこにいきなり軍隊が入ってきた。これは侵略だと思ってるんです。中国からすると、本来であればわが祖国の一部であって、それを解放すると。しかもチベットには文明文化がなかったから、中国がそこに革命を起こして人民を解放する。でもその人民を解放する中国が結果的にチベットに120万人の犠牲者を出し、命を奪った。私の兄2人です。1人は餓死させられました。1人は射殺されました。私とか親からすると射殺された兄は幸せだった。苦しまなかった、そんなに。餓死させられた兄は、最終的に自分の排せつ物を食べたって言ってるんです、周りの話聞くと。その話のほうがやっぱり悔しいってというか、悲しいってというか。ですから120万人のチベット人が命を奪われました。この1950年代、中国の人口は6億5,000万人ぐらいでした。当時のチベットの人口は600万でした。今、中国の人口は14億ですけど、チベットの人口はいまだにまだ中国政府によると480万だったり、それからチベット系の人たち入れて最近になって500とか600万にやっとなりました。つまりこの間に中国の人口が、倍になったのに、本来であればチベットも倍になっておかしくないんです。チベットの7,000以上あったお寺は破壊されました。お坊さんたち、あるいはそのエリート。それから地主、旧豪族や旧貴族は、もちろん人民の敵として人民裁判にかけられました。そして多くの人たちは、強制収容所に入れられて洗脳教育を受け、またそれに抵抗した人たちは、そこで命を奪われました。ポル・ポトがカンボジアでやったようなことです。特にエリート、エリートっていうとチベットの場合にはどうしてもお坊さんになる。

私たちは英国に訴えました。助けてくれって。インドに訴えました。助けてくれって。モンゴルとチベットは、相互条約、お互いにいざという時、助

け合うという条約があったけど、残念ながらモンゴルはそういう立場にはなかった。ネパールとも条約あったけど、ネパールもそういう立場にないです。

この時、インドのネルー首相は、せっかくアジアの国々が白人から解放された。チベットを助けると名目で、もう1回アメリカとか英国が入ってきたら困るっていう気持ちがありました。これは将来にも通用したんです。そこで周恩来は、ネルーに対しては、われわれはチベットのそれまでの行政を変えたり、内政干渉することは一切しません。17条条約を結んで、その第4条には、ダライ・ラマ法王を頂点とするチベットの行政に対して、一切、手を加えません。ただ外交と防衛だけは、中国が行うと言った。ネルーも私たちのチベットに対して説得して、17条条約を結んだんです。17条条約の第7条か8条に、チベットのそれまでの軍隊も、随時、人民解放軍に編入するというようなこと書いてます。チベットには、少なくとも自分たちの軍隊あったってことを、あの文書でも読めるんです。チベットの行政もあったってことを読めるんです。それからネルーが国連に対しても、英国に対しても、これはアジアの問題、私が仲介に入ってやるからということで、英国、アメリカの仲介も拒否した。チベットは17条条約を押し付けられました。

だけど7年間ぐらいは、その17条条約に基づいて北京政府と共存したっていったらいいかな。でも徐々に、北京政府はチベットの内政干渉をし、そしてそれまでの貴族、豪族、それから高僧、そういう人たちを次から次に逮捕した。最終的にはもう内政干渉どころか、例えば中国の軍人が最初は助けにきたってこと、多分、軍人には罪ないんですよ。下の軍人たちは、本当に自分たちはチベットを開放しにきて助けにきたって考えてると思うんです。そういう気持ちでやってきてるんです。最初は確かに、例えばチベットのおばあちゃんが歩いていると、人民の解放軍の軍人が行って助けようってするんです。でもやがて、例えばチベットでは水道があるわけじゃないんです。水を川からくまなければならぬんです。中国人の飲み物をチベットの女性がくんで届けると、そういう女性に乱暴するとか、そういうことが次から次へと起きました。ですからチベット政府は、もうちょっとしっかり抵抗して

れば、あの頃はまだ道路もできてないし、それから人民解放軍も共産党と国民党との内戦、日本との戦争でも弱いですよ。だけど残念ながらチベットは、そういうことでネルーの言葉、あるいは周恩来の言葉を信じて何とかしようとしたんです。

それが結局、条約を守らなくて、1959年に結果としてダライ・ラマ法王がインドに亡命するようになり、またインドは1962年、中国によって国境侵略されました。ネルーはショックを受けて、その後1年ぐらいでこの世を去りましたけど、やっぱり一番の後悔ですよ。それで今、私たちは平和五原則という言葉よく知ってると思いますけど。今現在は国と国の外交を結ぶ時に、この平和五原則は一つの基礎になってます。特にお互いの主権を認める、お互いに干渉しない。平和五原則を一番最初に使ったのは1954年の中印、チベットに関する中印通商条約、ここに平和五原則が入ってるんです。

この内政干渉しないとかそういうのは、当時本当はチベットのことをいってた。それで、同じ年にバンドン会議でこれがさらに10原則になって、10原則の基は5原則です。

そういうことでチベットは残念ながら結局、ダライ・ラマ法王は亡命するようになり、それから1972年まではゲリラ活動がありました。私たちの王様は、お坊さんだったもんですから宣戦布告してないんです、中国に対して。ですからずっとゲリラ活動を、このゲリラ活動を1960年代からはアメリカがまた援助するようになりました。インドも中国から侵略を受けたから、今度はアメリカの介入に対して、見て見ないふりをするようになりました。ところが1972年になって、ニクソンがいきなり北京にいて、キッシンジャーがその間にいろいろありましたけど、今日は時間がありませんから。そうすると、アメリカ政府は私たちに対して、これから6ヶ月間分のゲリラの援助はするけど、それからは勝手にしやがれと。大国によって小国は将棋の駒のように使われるんです。それで北京政府とアメリカは仲良くしました。

次の地図をこうやって見ると中華人民共和国の63%はチベット、ウイグル、モンゴル、満州。それから日本では朝鮮半島は、2分化されてると思ってる

けど、本当は3分化っていうか3つに分かれました。当時の中華民国は朝鮮族自治州をもらいました。北朝鮮は当時のソ連、南はアメリカの影響下に入りました。ですから中国、少なくとも1940年代、日本と中国、戦争する時の中国はわれわれはそこに入ってないんですよ。ですから私たちは日本人殺してないし、日本人もチベット人を殺してないんです。それだけ考えても日本人が広い中国とかっていうのはおかしいんです。そのような中国は存在しません。つまり中華人民共和国、もともと野望は孫文からありました。孫文は、最初に中華という言葉を考えました。孫文が中華という言葉を考えるのも理由がありました。それまでに24回、中国、王朝変わってるんです。せっかく中国人の王朝ができて、中国の中でまた周りから侵略されて。

ですから37%が本来の中国です。私個人の意見としては、安定した中国は多分世界にとっても必要です。中国が繁栄する必要もあると思います。だけど中国が強くなって軍事的に、そして覇権を目指すようなことになったら困るんです。ですから今、皆さんがいつてるあの広い中国は、少なくとも63%は今から七十数年前までは中国ではなかった。私は生まれた時に中国語ができませんでした。中国語の必要ないんです。だけど今は逆にチベット語を使うことを禁止されてます。

私は日本に来て亜細亜大学で中国語を取りました。一生懸命勉強して100点満点、2〜3回取りました。そしたら先生が「ペマ君は、チベット人だから」とおっしゃったんです。チベット人だったら中国語ができるのは当たり前だと思ってる先生の言葉にショックを受けました。それで私は中国語を、勉強するのをやめました。今ちょっと後悔してます。ですから私たち人間の記憶というのは、本当にあまり頼りにならないんです。今のような中国、それはわずかまだ100年もたってない。ただしうそも100回言えば本当になるように、北京政府は5,000年前からの歴史をいって、古代から中国の一部、チベットが一部だったような書物を書いて宣伝をしています。でもきちんと勉強すればそれは多分、すぐ分かることです。

私が何を言いたいかって言うと、現在の中華人民共和国、人間個人にも個

性があったり癖があったりします。中国の場合には特に今の中華人民共和国は、やっぱり領土拡張主義ですよ。今のここまでやってきたのは、領土拡張主義であり、そしてその後の例えば彼らの戦争、中国が中華人民共和国になってから戦争を幾つかしました。一つは、かつて中華人民共和国ができた時にいち早く中国を承認し、中国と友好条約を結んだインド。インドと中国は一時ヒンディー語で「インド=チンバイバイ」、つまりインドと中国はきょうだいであるということ。そしてネルーと周恩来は、これから新生アジア、新しいアジアの時代をつくる、そういう夢を共有して仲良くしてたのが、裏切られるだけではなくて、いきなり侵略されました。この時インドはボロ負けしました。理由は簡単です。インドは中国が襲ってこないと、ネルーは中国へ行った帰りに記者団に対して、中国は他の国へ侵略しないと書いた。もう信じきっていました。

それから2番目に中国が戦争したのは朝鮮戦争。朝鮮戦争の場合には、中国は上手にやって中国軍は行ってないですよ。中国軍を送ったけど、名目上は中国の義勇兵が同じ兄弟というか共産主義者を助けるために行くということです。それからあと1967年にロシア、当時のソ連と戦いました。これも領土問題です。中華人民共和国成立に最も大きな影響を与えて援助をした、ある意味で兄貴分であったソ連にとっても、結局領土拡張の問題で戦争になりました。それから1979年、ベトナム戦争、中越戦争です。中国とベトナムは戦争しました。同じ共産党ですよ。しかもかつてベトナム戦争の時はむしろの仲間です。

チベット問題の本質はやはり中国の覇権主義、領土拡張主義の犠牲になったということです。もう一つは、もちろんチベット自身が反省しなければならぬのですが、チベットが平和を信じ仏教を信仰し、そして自分たちが平和を望めば平和になると勘違いしてた。

だけど中国、特に今の中華人民共和国は常にどこかと戦争をしないと国民の不満を抑えることができない。毛沢東としては、チベットに西洋帝国主義が入って問題を起こしている。それを鎮圧してるようなことをいって、結局

国民に対してそういう戦争をやっているという緊張感と、そして団結を呼びかけるために利用した。その次の中国の、それと同時にさっきもう一つは日本は中国は大きいというけど、よく日本は島国で小さいとかっていうでしょう。あれも僕は非常におかしいと思うんです。確かに陸だけだったら日本は小さいです。38万平方キロメートルですから。しかし僕が大学生の時にちょうど亜細亜大学に布施明先生のお兄さんか弟さんたちが国際海洋法を作っていましたよ。初めて海に対しても法律ができました。各国の領土から12カイリまでは領海であって、その向こうは20キロだったかな、24カイリまでが経済的水域、あとは接続水域とかっていって。結局200カイリまでになると、日本は44万平方キロメートルになるんです。生活できる範囲。小さくないですよ。中国は伸ばしたくても後ろは陸ですから、先伸びないんです。それで中国の領土拡張は、多分、大義名分もある、彼らが常に大義名分をつくる。その大義名分としては台湾、彼らからすると台湾は中国の一部である。長い間、中華民国も自分たちこそが中国全土を代表する資格を持っている政府であるといったから、だからそれぞれが中国は俺のものであると。ですから台湾の蒋介石たちも、私たちに対して最初援助するけど、北京政府と同じような考えを示す。蒙蔵委員会というものがあって、チベット、ウイグル、そういうものは自分のものであるというようなこと、同じ主張をする。あるいは尖閣諸島に対しても、台湾も中華民国と同じ主張しないと、当時は自分こそが中国を代表するっていつてるから。毛沢東も蒋介石も俺は孫文の後継者だっていつてるわけです。

ですから中国からすると台湾を併合する、併合って言う彼らがいう統一または解放。これは当たり前のことであって、しかも急務であるってことです。12月31日のジャパントイムズに書いてあったけど、2016年2月24日だったかな、中央軍事委員会で習近平は、はっきりと尖閣諸島を確保しなければならない。尖閣諸島を確保しなければわれわれの発展がないということで、命令を出している。そしてその翌年から尖閣諸島周辺に中国の軍の演習ってどうか、そういうものが活発化されている。

です。中国の領土拡張主義っていうのは、一つはやっぱり中国に限らず、多分一つは国が大きくなるとさらにその国を維持するためにエネルギーが必要だったり、いろいろなことで、そういう領土拡張の夢を見るのはある意味で人類の歴史の中で、どこの時代にもあったと思います。どこの時代にも覇権国家っていうか、超スーパー帝国みたいなものがありました。

そうであれば、なぜ中国が世界の覇権を取ってはいけないか。なぜ反対しなければならないか。少なくとも今から100年ぐらい前までは、アメリカが超大国じゃなかった。英国だった。先の戦争で一番損したのは英国ですよ。正直言って、日本は自分の領土を何も失ってない。英国はたくさん植民地を失いました。それかもうちょっとさかのぼると、あの小さいスペインとかポルトガルとか、ああいう国々が世界を、少なくとも世界の大国だった時代があるんです。それはその時代時代の武器とか、あるいはモビリティ、移動性とかいろんなことがそれを背景にあると思うんです。ですから北京政府がいうように、2049年、これ私がいうんじゃなくて北京政府がはっきりいっているわけです。2049年までに世界の大国として、軍事的、政治的、経済的にトップに乗り出さなければならない。そうするという決意をしてる。しかもそれはただ口で言うのではなくて、そのためのシナリオとして陸のシルクロードと、この第1列島とか第2列島っていうのは、北京政府が1970年代以後、自分たちがここまでだったら自分たちの生命に必要だと。その次は、またここまでわれわれの生命線だと。さらに今度は、このグアムまで、アメリカに対しても太平洋は大きいんだから中国とアメリカが半分半分すればいいじゃないか、というようなことを言うようになりました。これは中国自身の経済力、軍事力が伸びるによって、彼らの目指す先も変わってきました。

具体的にそれをやるためには、一帯一路の陸のシルクロードと海のシルクロードです。ちょっと時間がなくなりましたので、細かい説明はしませんけど。要するに2049年、50年。2049年っていうのは中華人民共和国成立してから100年。国家100年の目標を達成する。それまでの、その夢を実現する中華大民族の夢を実現するための手法としては、この一帯一路を通して、ま

ずは経済的な枠組みをつくっていかうと。その中において、私たちの生活はほとんど海路、海、今日本は特に自給自足率なんか37%しかないのですから、ほとんど外国に頼ってる。まだ飛行機で運ぶわけにいかない。この海を押さえることが世界を押さえることになる。だからこのインド洋において、まず最初はインドを真珠のネックレスって言ってインドをまず包囲しようということで、インドの周りの国々と協力っていうか、中国が応援して港を造ってる。この港は当初は商業だといってるけれども、給油もする。

実際はほとんど軍が運営してるんです。それと同時に一帯一路を通して、パキスタン、スリランカ、バングラデシュ、いろんなところで港を造って、そして軍がそこを押さえる。それと同時に、もう一つ南シナ海、東シナ海においても、人工島などを造って基地をどんどん造っていく。今、中国は=ジブチ=にも、アフリカの向こうまで軍事基地を確保しているわけです。

それで今地球温暖化の結果として北極も溶けてきてるんです。薄くなってきて、それでもう一つ氷のシルクロード、裏からもやると。南極に関しては国際条約があって南極の基地なんかもあるけど、北極に対してまだ十分なものができない。また、宇宙ステーションを中国が持ってなかったから、勝手に自分たちで宇宙ステーションを造るとか。それから北極に対しても自分たちがルールを作るというようなことで、南回りの海路をつくって中国は完全に有言実行で2050年、2049年に向かって今動いているわけです。

これに対して安倍元首相は、まず最初は中国に対して話し合い、要するに国際社会のルールを守ってもらうためには、中国も国際社会に引っ張り出そうって精いっぱいやりました。僕なんかも首相官邸行って反対したんですけど、安倍首相は習近平を国賓として日本に呼ぼうと。それはやはり例えば、フィリピン周辺の島々に対して国際的な法律の専門の機関が結論を出しても、中国はそれは紙くずだって言って無視する。そういうのでは困る。中国が国際社会の一員として責任ある行動をしてもらうためには、中国に対して対話を通してやろうとするのは安倍さんの最初の姿勢だった。それと同時に一方においては、もう中国のほうは具体的に今のまず一つ最初の2つの

中国の屈辱の一つである香港は、鄧小平の時代において返還ができた。返還できたけど、結局かつてチベットと同じように約束は守らなかった。返還の時、英国に対して向こう 50 年間は少なくとも香港のそれまでの行政機関とか、そういうものに対しては手を出さない。でも 25 年でもう完全に今香港は本土化というよりも、本土以下の統制地域になりました。もう一つ、彼らの残ってるのはあと台湾です。そういうことで中国は南シナ海、東シナ海にどんどん人工島ができて中国軍隊がどんどん入ってきて。それから中国の海警、つまり海上警備隊は武器使用できる法律を作って軍の指揮下に置いたんです。今、日本の場合には残念ながらまだそういう武装なんかできない。日本はせいぜい「ここから出ていってください。ここから出ていってください」ってマイクで言うしかない。

そういうことに対してどんどん中国がやってくるから、安倍さんはインドの国会で 2 つの海の交わりという演説をしました。それはインド洋と太平洋。このインド洋と太平洋、つまりインド洋と太平洋を自由に開かれた地域にしなければならない。ルールに従うようなものにならない。そのためには、中国に対して、この地域における自由、民主主義、法の支配が行き届いている、あるいはそれを重んじてる国々が連隊を組んで、中国の領土拡張主義、覇権主義ならびに一带一路の延長線の中に置いて、それをさらに実現するために、例えば、世界銀行とかアジア開発銀行とか、そういうところがお金を貸す時は、同時にちゃんと国際社会のルールを守ってください、人権守ってくださいと、いろいろ条件を付けるわけですよ。でも、中国はそういう条件なしにお金を貸す。アジア開発協力銀行、それから BRKS 銀行などをつくって、どんどん発展途上の国々にお金を貸して。それと同時に、それらの国々の独裁者、例えば、中国本土においては、特に本土の中においても、ウイグル、チベット、南モンゴルなどにおいては、トイレにも監視カメラが付いている。それから中には、一人一人にチップを付けて、チップで今どこにいるかっていうことを把握できるようになってる。そういう監視国家をつくる強制独裁国家に対しての援助を増やしてる。

その中において、最終的には、南太平洋の小さな国々、これらの国々の中には今まで台湾との国交がある国々がある。こういうところでは、特にこれらの島々の有力者、有力者本人かまたは家族などに、いろいろもうけるようなことをやらせて利権を与えて。そして台湾との国交を断絶させる。それから中南米の国々もそうですけど、結果的に今、世界全体において独裁国家が増えていますよ。四十何カ国が、独裁国家になりました。それらの全ての独裁国家の後ろにあるのは北京政府です。ビルマにしても、あるいはラオス、カンボジアも残念ながら健全な民主主義国家としては今は機能しておりません。

安倍さんの自由で開かれたインド太平洋構想には中国は猛反発しています。それは当然のことだと思います。中国を包囲するものだと。それは多分、中国がいつてるのは正しいと思います。日本の政府とか時々そういう意思がないとかっていつて説明してますけど、そういう意思がなかったら、そういうのを作らなければいいですよ、金の無駄ですし。そういう意思があるからそういう枠組をつくってるわけですから。さらにその中において今度軍事的に中核となるインド、オーストラリア、それから日本、アメリカによるクワッド (QUAD) があります。

要するに中国が今拡張しようっていつてどんどん入ってるところを、何とかして阻止しようと。これを中国はアジア版 NATO だとかいつて反発しています。加盟国の中でも、例えばインドに対して、日本の専門家の中には、インドは本当に積極的にやるかについて懸念している人がいますけど。多分インドの場合には、中国を挑発したくないでしょう。また、現段階において、インドはまだアメリカを 100% 信用してない。それは 1960 年の始め、インドの名誉のために私が説明すると、インド独立後、アメリカと仲良かった。60 年代始めまでよかった。ケネディの時代までよかった。今のインドの IT が発達してるけど、あれの大学をつくるのも当時アメリカのガルブレイス大使の提言からできたものです。

ところが、ニクソンの時代になってキッシンジャーが NSC の顧問なって

から、パキスタンとインドの戦争の時にアメリカはパキスタンの側に立ちました。それから国連でインドを非難する決議を出した。この時にアメリカとか、英国なんかが中心になってやりましたので、インドからするとパキスタンは、その時、軍事クーデターの後に軍事政権だった。自分たちインドは民主制国家であるのに、なんでアメリカは民主国家ではなくて軍事独裁を支持するかいということで。それから=インディラ・ガンディー=がアメリカに行ったんですけど、ニクソンの態度が、上からこう見るような人だったから、途中で繰り上げて帰ってきた。その後のアメリカとか西側はインドに武器を売らなかった。隣の中国は核実験をやった。隣にパキスタンがいる。インドはロシアから武器を買うしかなかったんですよ。今は徐々に、アメリカも売るようにになりました。イスラエルも売るようにになりました。フランスも売るようにになりました。だから今は徐々に変わってきてます。これからインドも日本も武器産業に入って、インドも独自で作るっていうことに今動いています。今後はさらにアメリカなどが技術提供するというので、日本ともそういう技術協定などができていますので、多分インドもこれから変わると思います。変わらざるを得ないです。

インド自身も、この中国の脅威の対象ですから。そういう状況にあって今回のウクライナにあったようなことが、今度台湾であるということも否定できない。否定できないというよりも、私個人としては何かやるだろうと思っています。それが成功するかどうかは分かりません。しかし習近平は、やっぱり自分が毛沢東と同格ぐらいになるためには、何かレガシーを残さなければならぬ。毛沢東は、共産党革命を一応成功させた。少なくとも中華人民共和国ができた。鄧小平は香港の返還ということを果たした。

あと彼自身は、さっき言った2016年の軍事委員会でしゃべっているように、彼は台湾の開放っていうのは自分の使命だと思っている。彼がよく言っているのは「この問題と尖閣諸島の問題は、われわれの次の世代に、その問題を残してはならない。われわれの時代に、この問題を解決しなければならない」と言っているわけです。

ですから、今日会場の皆さんのおじいさん、おばあさんは戦争を経験してる。皆さんのお父さんもお母さんは、多分戦争を経験していない。しかし皆さんは、もしかしたら戦争を経験しなければならないかもしれない。しかもその可能性は私は大きいと思ってます。戦争を回避するためにはどうしたらよいか。それは祈るだけでは駄目です。デモだけでも駄目です。やっぱり中国などと向き合うには、もし相手がやったらこっちも十分な力を持つてるといふ、力に対して対応できる、僕、姿勢が必要だと思ふんです。あるいは覚悟を持つこと、それから仲間をつくることによって相手に対してけん制することが必要だと思います。そういう意味では、例えば核をつくるかつかからないかは別として、核をつくることのできるような体制をつくることだけでも、私はけん制になると思っています。作ること自体は、いろいろ問題があるかもしれない金もかかるし時間もかかるし。だけど日本だったらすぐできる。つくるか、つくるための法律も作りましたよっていうことになる、考えが変わると思ふんです。

例えば、インドが長い間、中国にびくびくしていました。中国は1967年だったかな5年に核実験成功しました。それからインドはずっと1997年までビビってるんです。隣に核を持つてる国がいる。だけどインドは核実験やった途端に、インド人の自身、誇りのようなものができました。僕はITも含めて、今インドはもう世界においても恐らく経済も、このままだとあと2年で日本を追い越す。世界第3の経済大国になる。人口の面では中国を追い越す。しかもインドは、人口がほとんど若いです。それとアメリカや外国にいる、あるいはドイツとかいろんな国にいるインド人はホワイトカラーです。大学卒です。今回英国でインド系の首相が生まれました。アメリカの副大統領はインド人です。今の世界のいろいろ有名な会社、社長はかなりインド人が増えました。昨日僕ちょっと新聞見たら、少なくとも世界の有名なその企業10社ぐらいの社長やCEOは今インド人です。そういう意味でインドは核実験を境にして自信を取り戻しました。自分たちもやればできるんだというようなこと。だから僕個人としては、日本の皆さんが別に戦争するかしないかは

ともかくとして、戦争もあり得るって前提の覚悟ってどうか、そういうことを持てば戦争を回避できるかもしれません。

相手は弱いと思ったら突っ込んでくるんです。例えば、今回安倍元首相の国葬に台湾って名前を言って、台湾の代表が来てることを日本はちゃんと発表しました。今までだったら中国はものすごく怒ってますよ。中国が怒るよりも日本国内において文句言う人たち、それをワーワー宣伝する人たちがいるですよ。あおって記事にして。今回黙ってるじゃないですか。確かに政府には抗議している。

だけど、前ほどやってないんです。似たようなことが、今回、安倍元首相の国葬に中国は、共産党の中央委員以下の人を送ってきました。中央委員205名かな。で、今回来た人は、中央委員以下の人で。実は中国には8つの政党があるんですよ。共産党だけじゃないんです。それは、中国として、世界に出して、いや、われわれは共産党だけじゃなくて、いろんな政党があると。だけど、この政党は全部、外に対するカムフラージュであって、実際のその人たちは、隠れ共産党員で、そして党が認めて、党が金を出して存在する政党です。そういう政党の代表で、政治協商会議は、何の力もありません。日本では参議院に相当するっていうけど、日本の参議院のほうがはるかに権限があります。中国の政治協商会議は、そういう権限はありません。その25名の副主席の1人が今回来たんです。

僕は今回、岸田内閣は偉いなと思ったのは、今までだったら中国、例えば中国の部長っていうのを、日本は大臣扱いしているんですよ。中国の大臣、部長の上に国務委員がいて、国務委員は上に副首相がいて、首相があるんです。でも、今回はちゃんと日本も、岸田首相は外国から来た201の国は地域の団体や地域における首脳級のかたがた全員に、個別に会いました。だけど、中国の代表に対しては、官房長官が対応しました。これが、外交で、対等平等で正しいと思うんですよ。こういうメッセージが、中国に、私は中国が理解しやすいと思う。だから、僕はあれだけでも、世論調査で岸田内閣の支持率が上がってないのはおかしいと思っています、個人的には。

実は、チベットに対しても、中国は立場弱い時、1976年、77年、中国で文化大革命が起きて、ほとんど無政府状態になって、国が貧しくなった。鄧小平はそれを立て直す時に、私たち亡命政府、チベットが、特にダライ・ラマ法王が西側に非常に人気がある。それから、中国はオリンピックをいずれやりたい。その時に、われわれに対して話し合いましょって言ったんです。独立って言葉以外は、何でもいいよって言うてくる。で、私たちも、本当に多少期待しました。私、3カ月間、中国に行ったんです。実は当時、私たちがいた1979年に北京政府の鄧小平とダライ・ラマ法王のお兄さんが、直接会ったんです。

その時向こうは、独立って言葉以外、何でも話し合う用意があると。私たちの条件は、チベット本来を分断することは、絶対に認めない。今、チベットは6つの行政区に分けられてるんです。皆さんが見てるチベット自治区っていうのは、チベットの一部です。青海省、ダライ・ラマ法王が生まれた青海省は、アムドっていうんです。私が生まれたのは、今、四川省になっちゃってるんです。パンダ、あれは私のふるさとの近くで、本来、チベットの動物です。それで行った時に、当時中国の地図を持って、私たちは本来のチベットっていうことで、彼らと一緒にチベットの国境全部、確認して、車でですけど、歩いたわけじゃなくて車で行きました。当然に、私たちは本来のチベットっていうことで、それを確認しに行ったんです。で、その時は彼らもOKした。ところが、話をずっと続けて、続けて、続けて、だんだんと彼らが強くなると、最初は鄧小平が会って、次には、今の習近平のお父さんとか、そういう副首相級が会って。最初、僕たち20代の代表団でも、副首相が会ったんです。その時の中国は、私たちが力があるということよりも、世界の世論を気にする時期があったんです。今、これからの中国は変わるんだ。中国は今までと違うんだということを鄧小平は、一生懸命演出してました。でも私たちはその時、演出と思わなかった。鄧小平はいい人で、胡錦濤も余計、胡耀邦も趙紫陽もみんないい人だと思いました。それで行って話をして。ところが、中国としては、世界からチベット問題と言われるわけです。アメリ

カをはじめ、ヨーロッパ議会から。しかもダライ・ラマ法王が、あっちの国に逃してもらおうような雰囲気があるんですよ、その時に。

ところが、話をしてて、今度習近平の時代になって、2012年になったら、突然、今までわれわれが話してきたのは、チベット自治区の話だ。他のチベットの領土はそれぞれ四川省、あるいは甘粛省、あるいは雲南省、あるいは青海省で幸せに暮らしている。彼らが望んでいない。だから、今までしゃべってきたのは、チベット自治区のことであって、これからチベット自治区の会長、場所もちょっと増えてきたように、自治の話だ。われわれは違う。われわれは、東西ドイツや、南北朝鮮のようになることは絶対に望まない。だから、最初から話をする時から、あくまでも本来は、私たちが言う本来のチベット。私が地図で見せた、あれが本来のチベットです。それを対象に話してきたと思ったら、いきなり、いや違う違う。今まで言ってきたのは、あくまでもチベット自治区の話だということをいきなり言うわけです。だから、やっぱり中国を理解するっていうか、どこの国に対しても同じでしょうけど、私たちはそれぞれの国の文化、それから過去の歴史、何をやってきたか。そういうことを研究する必要があると思います。

憲法9条も、日本が一方向的に平和、日本が陸海空軍を持たないって宣言しているだけであって、それに対して、国際社会は何の義務もないんですよ。

村山談話も、河野談話も、日本側が談話を発表したんですね。日本はそれを守ろうとする。だけど、中国にとっては、条約でさえも、時間稼ぎ。文書化しているかどうかは関係ない。香港を見てください、何が起きたか。しかも、英国と中国の、確かあの時の合意書は、国際法的にもちゃんと登録してますよ。でも、中国からすると、そういう自分の都合の悪い時は紙くずだ。ですので、プリンケン、米国の國務長官の話だと、中国の台湾侵攻は早まった、早くなると。その根拠としては、多分、今回の政治協商会、中国共産党の大会の分析だと思っています。そうなってくると、多分、日本も、今、ウクライナで戦争をやっただけで日本の物価は上がるし、もっと貧しい国々、スリランカとかそういう所は、もういろんな石油使う商品、手に入らないんです

よ。子どものおむつでさえも、今、買えなくて困ってるんです。ましてや、今度、日本のすぐそばに戦争が起き、また日本のように自給自足率の低い国。周りに戦争になったらどうなるかっていうことを、皆さん、ちょっと考えてほしいと思います。

今日は私、こういういい機会をいただいて、好き勝手なこと言ったけど。私も今は一応、一日本国民でもあります。ですから、この国の将来も心配しなければならないし。自分自身ももう一回、難民になるのは嫌ですよ。難民になるっていうのは、本当に大変なことです。例えば、難民パスポート。一応、難民パスポートの上には、差別してはならないって書いてあるんですよ。書いてるけど、どこの国に入っても、差別されます。もう空港で、まずちょっと待って。ビザを申請したら、まずは貯金が幾らあるか、相手の国にどういところまで、いろいろ聞かれて、国際会議があったら、国際会議が終わったところにビザが出るような。そこに日本のパスポートもらったら、本当に自由に飛べるようになった。それだけでも、国のありがたさっていうのは感じます。多分、日本の皆さんにとって、日本のパスポートのありがたさっていうのは、特に感じてないかもしれない。日本のパスポートは、他の国よりも強いですよ。だから、1年間で2万ぐらい盗まれるんです、日本のパスポートが。それはやっぱり皆さんのお父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんが頑張って、世界から信用される国にしたんです、日本を。日本人が他の国に行って、他の国のほうが住心地いいからってオーバーステイすることないと信じているから、日本のパスポート、空港でもビザをもらえるんです。こういうことは、国を失って初めて、あるいは国を失った人間しか経験できないことなんです。ですから、今日は特に、学生もかなりいると思いますけど、皆さんの時代は、お父さん、お母さんと同じような時代ではないかもしれないです。もっと厳しい時代が来るかもしれません。その覚悟はあったほうがいいと思います。

一応、一方的な話は、長引きましたので、ここで終わりにして、質問があれば、質問受けたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

宍倉：ペマ・ギャルボ先生、どうもありがとうございます。ここから、質疑に移りたいと思います。その前に、あまり時間もありませんが、一応、コーディネーターということで、お話を簡単にまとめさせていただきます。まず、チベットの歴史についてです。遊牧民というところからスタートし、20世紀に中華民国の下に入りますけれども、それまでの長い歴史のお話があったと思います。それからあと、日本との関係は大変深く、一つは、真の仏典を持ち帰るということで、明治政府の時に日本から仏教徒がチベットに行きましたが、一方で彼らは、いわゆる西洋列強からの「グレート・ゲーム」と呼ばれるものの中で、地政学的な戦略ということでのスパイでもあったと、こういう観点があったと思います。それからあと、他方で日本はチベットの近代化に努めたということで、仏教をベースとした憲法の存在ということのお話などがあったと思います。

それから、あと、2点目としては、中国の狙いについてです。アヘン戦争や日清戦争、近代外交の屈辱の歴史ですね。こういったものがありましたけれども、ただ一方で何度もお話があったとおりですが、領土の回復という、いわゆる詭弁(きべん)を呈して、中国は実態として他の民族に対してのジェノサイドや侵略を行ってきたということです。特に小国は大国の駒として使われることがあるということで、まさに法的な解決以上に、政治的な解決ということが非常に重要になってくるんだといったお話もあったかと思います。そして、最近の覇権主義というところでの、いわゆる経済の面からの一帯一路の政策。それからあと、南太平洋のほうにも経済援助を行っています。それも実態として独裁国家を増やすことによって、実質的な中国の侵略というものを許しているといったお話があったと思います。最後に、日本はそういった中で、どのように対策、対抗していくべきかというところから出てきたのが、安倍元首相がお話をされた「インド太平洋構想」ということですね。民主主義と法の支配による対抗軸をつくってくと。クアッド(QUAD)という枠組みが非常に重要になってくるということ。それから、あと最後に国があることのありがたさということのお話を何度も先生がされておられまし

たけども、力には力で対抗する姿勢、それから国民としての覚悟といったものが求められるのだらうといった、こんなお話があったかというふうに思います。

それ以外にもたくさん重要なお話があったと思うんですけども、こういった視点、あるいはそれ以外の視点も踏まえて、ご質問がある方、挙手をいただけましたら係の者がマイクを持っていきますので、ご質問いただければと思います。またあと、オンラインの方、もしも質問ありましたら、チャットで書いていただければ取り上げたいというふうに思います。それでは、どのような観点からでも構いませんので、ご質問がある方、ぜひ挙手をいただければと思います。いかがでしょうか。よろしくをお願いします。

ペマ：質問がないのが一番怖い。何でもいいんですよ。今日話したことと関連あるもの、ないもの。

宍倉：ちょっと私からというのは反則かもしれませんが、口火を切られていただくということで。クアッド（QUAD）の重要性ということで出てきましたけど、今のアメリカを見ますと、民主主義が浸透し過ぎて、非常に民族間の独立主義が国家の分断を招いているように思われます。このような民主主義の在り方で、21世紀の民主主義国家はなかなかやっていけないところもあるのかなと思います。そういった中で、日本は同じ民主主義、議会制民主主義を掲げる国家として、少し抽象的ではありますが、今後どのようなスタンスで国の在り方を示していけばいいのか。それとあと、日本は具体的に国際社会にどのように訴えていけばいいのか。こういった点、もしよろしければご教示いただければと思います。

ペマ：一番最初、僕が言ったように、人間も若さとかそういうのを失って、やがて老化していくように、多少アメリカの民主主義もさびてきました。私たちが若い時は、アメリカの民主主義はもっと輝いていたと思います。その一つの理由は、アメリカの経済力というよりも、多分、アメリカの移民問題だと思います。これは私個人の意見ですけど。

やっぱり今、アメリカの住民の四十何%はもう移民ですね。で、この移民

の人たちはあくまでも、経済的豊かさを求めている、そこに自由とか民主主義とか、そういうことは全く関係ない。また、そのような価値のために、アメリカ合衆国の建国の精神がどうのこうのってことは関係ない。そうすると、この人たちは、アメリカがかつてのような自由民主主義のために何かやるってというようなことに関しては、無関係であり、またそれを、支持しないということが一つあると思います。

それからもう一つは、日本では日頃、私が尊敬するかたがたを含めて、保守系のかたがたにはトランプさんが非常に人気あるんですけど、私はやっぱりトランプさんがかなり打撃を与えたと個人的には思っています。今回、ブラジルの選挙で、たった2%の差で、ちゃんと負けは負けと認めました。民主主義においてトランプさんがやったことは、私はそういう意味で、アメリカ合衆国の顔に泥を塗ったと、私個人的には、そう思っています。そういうことから見ると、ベトナム戦争の時の、あるいはベトナム戦争の時よりは、湾岸戦争の時のほうが、国民の支持を得られなかった。それはなぜかということ、やっぱり今は、みんなテレビでその日のうちに見られるから、自分の子どもが戦場にいるっていうようなことで戦争に、あまり賛成しないんですよ。だから、そういう意味で、アメリカが例えば今後台湾も含めて、私たちのために戦うっていうことは、どこまでできるかってことについては、多少、覚悟しなければならない。それはもちろん、アメリカはアメリカの国益を考えたら、防衛っていうのは、なるべく遠い所から守らなければならないから。そういう意味では、アメリカは、守るとするでしょうけど、それに付いていく国民の質が変わったということ。これもちょっと考えなければならないんじゃないかなと思います。

それから、日本が安倍さんの時は、日本の力っていうよりも、安倍さんっていう個人の魅力、指導者同士でも、オーストラリアの元首相がどっかで書いていましたけど、安倍さんの調整能力。みんながいろいろ議論して、何かする時に、最後にちょっとまとめたり、そういう指導力があつたということだったけど。これから、バイデンさん。トランプは押しはいいんですよ。押

しはいいんですけど、計画性がないのと、それからチームワークができない。私からすると、彼はアメリカファーストではなくて、自分ファースト。アメリカでも共和党でもない、自分の都合、自分でやっていくということ。で、バイデンさんは、今、年齢のこととか、確かにいろいろハンディを背負っていますし、それから民主党そのものは、また国民の中において、かつてほどの魅力的なものがなくなった。そういう意味で、これから誰がリーダーになるか、このクワッドとかの。日本も、岸田さんは総裁選に勝った時も、安倍さんの計画を継承するとは言ったけど、これからどれだけできるか。でも、今の段階でいくと、それやるしかないですよ。

一方においては、中国はもうどんどん攻めてきてるから。で、攻めっ放しになることはできないと思う。それから、アメリカの情報関係、それから軍、こういうものは、やっぱり今までボトムアップっていうか、どんどん下から上に提案してきた。こういうことに対しては、多分、トランプよりもバイデンのほうが十分に飲み込みも早いし、それから下に対する信頼もありますから。アメリカがリーダーシップ取ってくれれば。インドは、インドにとっても死活な問題ですよ。

インドだけでは中国と戦えません。日本も日本だけでは中国と戦えません。だから、今は多分、アメリカもインドも中国も、お互いに必要としてる。必要だっていうことをお互いに十分に認識しているから、これで当分、少なくとも10年、20年はこの関係は続くんじゃないか。その後は、国際関係ですから、世の中、どう変わるかわかりませんが、多分、この10年、20年は、今の新しい体制でいくしかないんじゃないかな。僕はこう思って、期待もしていますし、そうなるようにとっております。

宍倉:ありがとうございます。ほかに、チャットのほうで質問が来ています。「選挙とかで自らの意見を反映させること、日々勉強に励んで学びを深めることはもちろんですが、その上で、われわれ学生が今特にすべきことは何か。特に学んでおいたほうがいいことは何でしょうか」ということです。これは、私も気になっていることですが、いま授業をやる中で、インターネットの影

響はやはりものすごい大きいなと思っています。学生のリテラシー能力がすごく重要になってきたと思います。もちろん学生に限らずですけども。そういったところも含めて、ぜひご教示いただければと思います。

ペマ：何事にも関心を持つことが、まず大事だと思いますね。マザー・テレサが日本に来て、一番悲しいことは、日本人は、他人に対して関心を持たないということを言って帰りました。特に若い方だったら、自分自身に関心を持って、自分の家族に対して関心を持って、自分の社会に関心を持って、自分の国に関心を持てば、多分、人類に対しても、地球に対しても関心を持てる、愛情を持てるようになるんじゃないかと思います。そのためには、一つはやっぱり関心を持つと、自然に目に入ってくるんですよ。それまで全く無関心だったものに対して、ある時、関心持ったら情報って向こうから飛んでくる。ですから本当に今、この世の中に対して、自分に対して関心を持つということが、まず大事だと思います。

それからもう一つは、大学になぜ来るか。なぜ大学で学ぶかってこと。僕は、もう大学で世話になって、学費から給料もらって、生活して長いんですけど。学生たちに一番言いたいのは、勉強は自分がやれば、高校、中学校ぐらい出れば、本もあるし、今、インターネットあるから、今何でもできるんですよ。であれば、なぜ大学に来るか。それはやっぱり先生たちの経験、先生たちの考え、そういうことから学ぶものがあるからだと思います。これは冒頭で申し上げましたが、私個人の意見ですから、後で今日、僕を呼んでくださった先生たちが、人民裁判にかけられたら困るんですけど。やっぱりもうちょっと先生方も、学生に対して、積極的に自分の考えとかそういうの、僕は言うべきじゃないかと思う。そうじゃなかったら、教科書、みんな読めるんですよ。それを解釈とか、それはやっぱり先生しかできない。だからできれば、先生に対しても関心を持ってほしい。先生のことを関心を持って、先生のこと好きになると、成績も上がるし、勉強も楽しくなる。嫌いな先生の科目はもう退屈になるし、成績も悪くなる。だから、関心を持ってほしい。

それからもう一つ僕が、日本の若者に言いたいのは、私たちみんな生まれ

てきた時に、お父さんとかが、少なくともお母さんにお尻拭いてもらって、それから幸いに日本の場合には、皆さんの年齢だと離乳食あるから、昔だったら口でかんで食事を与えてくれる。やがて、そういう人たちがもう一回年取ったら、私たちがそれをやらなければならない。それをもしやることを諦めたら、次の人たちはそういうやるんだってことを知らなくなると思うんですよ。他の動物はみんな、そうやって学んでますよ。今、人間のほうがちょっとひどい。ですから、それはやっぱり特に若い人たちが学ぶっていうことは、回り見て、そしてそこから見て学ぶってこと、そういうこともぜひしてほしいと思います。

宍倉：ありがとうございます。あと、最後にもう一つチャットで質問が来ています。「沖縄侵略の見通しを教えてください。台湾侵攻の次に尖閣諸島が占領されることもあり得ると思いますか。また、台湾包囲のためには、与那国島の占領は効果的だと思いますか」ということで、お願いします。

ペマ：私たち、私たちっていうことも、日本人的な言い方だけど。日本人は、すぐわれわれはとか、私たちって言って、誰が私と意見同じか分からないのに私たちって言うてるから、私もつい私たちとか言うけど、私個人においては、神様じゃないんで、予言はできない。ただ、予測するっていうのは、今までのいろいろ読んだ本とか、いろんな経験、いろんなことを見て、データっていうか、資料っていうか、その出来事に基づいて考えるわけですね。そうすると、沖縄の侵略の要因は幾つかあると思います。要因の一つは、中国は数年前から、例えば中国の有名な大学の先生が、沖縄は一度も日本の領土になったことないとか、そういう論文を出すわけです。そうすると、それに対して反論があるかどうか、向こうは見てます。だけど、残念ながら、私、日本であまりそれが見当たらないです。それから、もう一つは、日本の中に沖縄、独立を唱える先生とか、そういうかたがたが中国へ行ってシンポジウムやったり、大会をやっています。それは、やっぱりある意味で、こういう人たちが、もし中国からなんかやってきた時に、その手引きするような役割を果たす可能性があって。またその侵略に対して正当性をもたらすような要因をつく

ることがあるんじゃないかなと思うわけです。

それともう一つ、何年前かに、NHKで、何年前もそうだし、つい最近も沖縄の特集だったんですけど、いかに沖縄は日本よりも、島津さんからいじめられるよりも、中国に対して好利用して、中国に対して朝貢して、中国の文化的影響がいかにあるかというようなことを宣伝していました。それと、中国の場合に、例えば観光客だけでも、政府の命令でどこに行かせるかってことできるわけですよ。だから、コロナウイルスがなかったら、かなり集中的に狙っていた時があったと思います。それで、そのために沖縄の人たちは、悪気ないんです。中国人を喜ばせようと思って、中国に合わせて、中国と沖縄は親しいっていうことを示すような文化交流をやったり、そういうことやってしまうと、やがて中国は、ほら見ろ、われわれのものじゃないか、というようなことを言うてくるんです。ですから、私は可能性、日本がしっかりしなければ、そういう可能性は大いにあると思います。

チベットに来た時も、かつてチベットのやっぱり若い人たちの中には、中国共産党に入って、共産党が本当に民族自決権を認めるって信じた人たちがいたわけです。

ですから、そういう人たちがおられるっていうこと。そういう意味では、僕はあらゆる意味で、日本はちょっと、日本の文化とか、そういうことをすぐ、もともとは中国からとかっていうのが、多過ぎるような気がするんですよ。盆栽でさえも、そのように説明する。そうじゃなくて、私が思うには、中国にあったかもしれないけど、日本人が頭を使って、日本人が改良して、日本のものになって、日本の文化があると思うんですよ。それは私たち人類のあらゆるものは、確かにどこか、誰かに似てますよ。影響受けてますよ。だけど、日本人ほど、自分の権威づくりするために、さかのぼって中国にわざわざ元は中国だっというようなことは、僕はゆくゆく日本の安全保障のために、文化的にはマイナスだなと思います。そういう意味で、中国は多分、チャンスがあれば逃さないと思います。

それと、もう一つ、日本国内。海外行くよりも、沖縄に行くほうが高いん

ですよね。航空運賃なんか。あれも僕は日本政府は考えるべきだと思います。例えば、台湾、韓国行くよりも、沖縄行くほうが、運賃確かに高いですよ。だから、もっと交流できるような環境整備っていうものが必要だなと思いました。

宍倉：ありがとうございました。大変名残惜しいところではあるのですが、時間が来てしまいました。そろそろ本日の講演会を終了させていただければと思います。ペマ・ギャルポ先生、長時間にわたりまして、大変貴重なお話本当にありがとうございました。皆さま、ぜひ今一度盛大な拍手をお願いします。ありがとうございます。

また、冒頭申し上げましたけれども、本日会場の外で先生の最新のご著書を販売しておりますので、ぜひご購入いただければと思います。最後に、本学の比較法制研究所の公開講演会にご参加いただきました皆さまに、厚く御礼申し上げたいと思います。今後も本学の研究、あるいは教育にぜひともご協力をいただければというふうに思います。ということで、以上であります。令和4年度の比較法制研究所の公開講演会を閉会とさせていただきます。長時間にわたりまして誠にありがとうございました。